

心理臨床家の保育者支援を考える

：「気になる子どもの保育フォーラム」の実践から

今野 直子 お茶の水女子大学大学院 人間文化創成科学研究科
斉藤 あゆみ お茶の水女子大学大学院 人間文化創成科学研究科
太田 祐貴子 お茶の水女子大学大学院 人間文化創成科学研究科
青木 紀久代 お茶の水女子大学

要約

本稿では、保育において保育者が気になる子どもについてその理解と対応を学ぶ「気になる子どもの保育フォーラム」の実践を報告する。研修後の参加者の振り返りの分析を元に、実践の成果と課題を検討した。更に心理臨床家による保育者支援のあり方について考察した。研修では、心理臨床家は事例検討での助言やグループのファシリテーションを行い、保育者が自ら学び、対応を考えるという主体性を支える役割を担っていた。研修後の振り返りアンケートの感想を KJ 法を用いて分析した結果、「事例発表を通して学んだこと」、「子ども理解の視点の広がり」、「子どもを取り巻く環境への対応」の三つのカテゴリが得られた。「気になる子どもの保育フォーラム」に保育者が主体的に参加し、自園の気になる子どもへのかかわりに活かしていたという、心理臨床家が行う保育者支援の一つとして一定の成果が得られたと考えられる。

キー・ワード：「気になる子ども」、心理臨床家、保育者支援

I 問題と目的

近年、保育所に求められている課題の一つとして、配慮を必要とする子どもへの対応が挙げられている（全国保育協議会, 2008）。こうした配慮を必要とする子どもは、何らかの障害があるとは認定されていないが、保育者にとっては保育が難しいと考えられ、「気になる子ども」と位置づけられる（本郷ら, 2003）。A 市では、こうした気になる子どもへの対応に関する、継続的な保育者専門研修「気になる子どもの保育フォーラム」を行ってきた。本保育者研修は、A 市私立保育園協会より青木ら（2001）が依頼され、発達臨床心理学的な観点から継続してきた。

保育の場での心理臨床家の活動は多岐に渡り、

気になる子どものアセスメントや保育者との協働による個別支援や家族支援などがある（森田・渡邊, 2012）。また、気になる子どもについてのケースカンファレンスや研修にて心理臨床家の参加が報告されているが（松古, 2012）、その役割や働きについては更なる検討が必要である。

本稿では、気になる子どもへの対応に関する継続型研修の実践から、心理臨床家による保育者支援の在り方を考える。はじめに、研修会の全体像を概観した上で、事例検討の一つを取り上げ、論じる。続いて、研修への参加後アンケートの分析から、参加者の体験について考察する。

II 「気になる子どもの保育フォーラム」の概要

1. 研修会の沿革

2001年より、A市私立保育園協会とお茶の水女子大学青木紀久代研究室の協働のもとで「気になる子どもの保育フォーラム」が本格的に実施されるようになり、現在まで毎年3回のフォーラムが行われている。当時研修会のあり方について、参加者のニーズをヒアリングしたところ、保育者の求める研修会の形は、今、自分がかかわっている気になる子どもについて理解を深め、対応するための助言を得られるものであった。そこで、本研修会は、現時点で参加者が直面している臨床課題の解決に、できる限り応える役割を重視してきた（青木, 2002; Shimamoto et al., 2008）。しかしながら、心理臨床家が全ての参加者の保育相談を受けていたのでは、保育者の主体的な研修会にはならない。当面の臨床的なニーズに応えながらも、保育者集団がエンパワーされるような運営が望まれた。

以上から、本研修会の目標を「参加者が、気になる子どもの保育に孤立感を持たずに、自信を持って取り組めるようになること」と定めると同時に、長期的な本研修会を心理臨床的子育て支援のコミュニティアプローチと位置づけた（青木, 2006）。

2. 研修会の参加状況

研修会は、年3回行われる。例年、第1回が6月、第2回が11月、第3回が翌2月頃実施される。参加者は、A市の私立・公立保育園から、保育士（担任・フリーなど）が各園1~2名であり、毎年、25園40名程度が参加している。参加者は1年間概ね同じメンバーである。

第1回の前に、気になる子どもについての実態調査が行われる。A市私立保育園協会に入ってい

るすべての保育園(以下、園と略記)に「気になる子どものアンケート」(Aoki & Baba, 2002)が配布される。保育者は、自身がかかわっている気になる子どもの最近の様子や園での対応、家庭の様子などについて回答する。参加者はこのアンケート結果に基づき、気になる子どもの類似する特徴ごとに予め定められたグループに分けられる。事前に自園の気になる子を挙げ、アンケートに答えているので、その子どもの事例を携えての研修参加となる。

A市私立保育園協会の研修委員（ファシリテーターを担当）と著者ら臨床心理士から成る心理スタッフ（スーパーバイザーやファシリテーターを担当）で、事例検討会を運営し、アンケート調査全般を心理スタッフが担当した。

3. 研修会の流れ

第1回研修前：新年度が始まって、クラスが落ち着き始めた5,6月頃に気になる子がクローズアップされ始めるため、最初の実態調査（アンケート調査1）を行う(図1)。これがニーズアセスメントであり、介入していく臨床的問題のベースラインとなる。

第1回研修：研修会の冒頭で心理スタッフよりアンケート集計結果の報告と質疑応答を行い、全体的な臨床像を共有する。そしてグループに分かれ、参加者が持ち寄ったすべての事例の共有と次回までの課題を話し合う。主に保育臨床の現場に携わっている臨床心理士や研修委員がファシリテーターとしてグループに入り、事例検討をサポートする。スーパーバイザー、研修委員長らは、各グループを巡回しながら助言していく。グループでの事例検討の内容については後述する。最後に、グループ内で話し合われたことについて全体で共有し、スーパーバイザーがコメントする。

第2回研修前：再び、第1回到答した事例と同

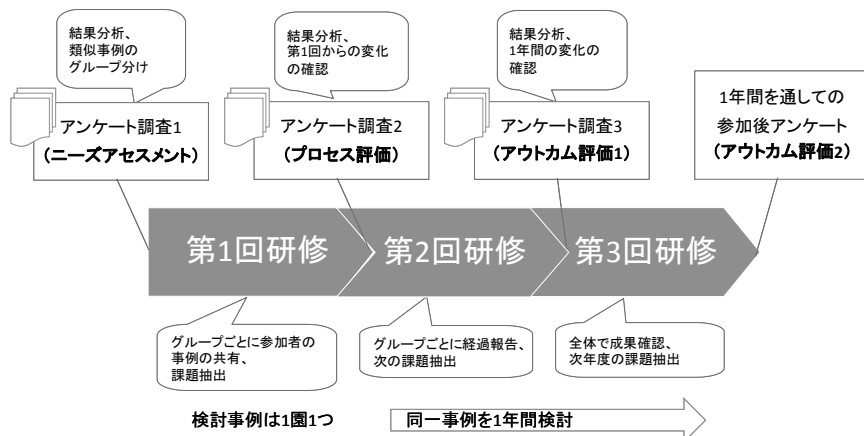


図1 研修会の流れ

じ子どもについてアンケート調査を実施する。これがプロセス評価となる。その結果から、子どもの様子や園でのかかわり方の変化が明らかになる。

第2回研修：第1回を受け、課題に対し園で実際に取り組んでみて、子どもの反応が見られ始める頃に、第2回の事例検討にて様子を報告し合う。子ども理解の修正や、かかわりと子どもの変化のつながり、次の課題について話し合う。アンケートの集計結果報告や、事例検討、参加後アンケートの流れは第1回と同様である。

第3回研修前：年明け、第1回、第2回と同じアンケート調査を実施する。その結果から、子どもの様子や園でのかかわり方の1年間の変化が明らかになる。これが1年間のアウトカム評価の一部となる。

第3回研修：アンケート集計結果報告によって、提出事例の1年間の変化を共有する。第3回は、グループでの事例検討ではなく、各グループのモデル事例の1年間についての報告を全体で共有する。子どもの理解と、かかわりによる変化を追い、成果を確認し、次年度の課題を見出す。アウトカム評価2として、参加者対象の参加後アンケートを実施し、研修会自体の評価を検討していく。

4. 気になる子どものアンケート

先述の青木らによる「気になる子どものアンケート」は、保育者が気になる子どもを一人想定し

て、その気がかりを評定していく質問が主となる。すなわち、「認知発達の進度の気がかり」「注意衝動のコントロールの気がかり」「対人関係の取りにくさの気がかり」「家族環境の気がかり」の4下位尺度24項目(気にならない[1]～気になる[5]の5件法)から構成され、得点が高いほど、該当する側面の気がかりが強いことを示す。

「認知発達の進度の気がかり」には、言語の表出・理解の遅れ、手先の不器用さ、身辺自立の遅れ、目線が合わない、常同行動等が含まれ、「注意衝動のコントロールの気がかり」には、いざこざ・かんしゃく・パニックの起こしやすさ、集中しにくさ、多動、被害者意識が強い等が含まれる。また、「対人関係の取りにくさの気がかり」は、分離不安が強い、子ども同士でかかわれない、大人の様子をうかがう、表情が乏しい等が含まれており、「家族環境の気がかり」には、親の無関心、親との連絡がうまく取れない、親子関係が気になる等が含まれる。

5. アンケート調査及び研修会実施にかかる倫理的配慮

全てのアンケートは、作成段階で主催関係者の同意を得ており、かつ子どもが特定されないよう匿名とし、園名もID化して保管するなど、細心の注意が払われている。事例検討も十分匿名性が守られる形で行われている。

また、学術的な発信についても、主催関係者に了承を得ており、この協働実践が継続されている。

Ⅲ 「気になる子どもの保育フォーラム」におけるグループ事例検討の概要

1. グループ事例検討の流れ

グループ事例検討では、予め参加者が気になる子の概要を記載した事例検討用資料（気になる子どものアンケートと同時に提出）を元に、それぞれの事例について発表を行い、その後話し合いが行われる。ファシリテーターは、グループの事例検討がスムーズに行われるようにサポートを行う。この資料を作成することにより、参加者は自分の「気になる子ども」の事例について振り返り、整理することができる。第2回研修会では、前回の研修会を経て事例とかかわった経過の報告を行う。

第3回研修会では、グループから選出したモデルケースについて、事例の概要、気がかりな点、園での取り組みとその後の変化、現在の子どもの様子、「気になる子どものアンケート」結果の変化、今後の取り組みを全体に向けて発表する。

このグループ事例検討を通して、参加者は具体的な事例について考え、課題や対応のヒントを得る。グループは同様の事例を持つ参加者ごとに構成されているため、参加者はグループ体験を通じて、気になる子どもの保育を行っているのが自分だけでないことが体感できる。また、事例検討は、参加者が他園の事例に共感しやすく、それぞれの園での工夫を参加者同士が共有し、自園に持ち帰り、実行しやすい構造となっている。こうした事例検討を通して、個別に取り組んでいく目標や課題が導き出されると共に、グループ共通の課題も抽出される。参加者はグループ共通の課題と個別の課題の両方を得て、それぞれその課題に取り組んでいく。

2. 検討グループの特徴

研修会では、3つのグループに分かれてそれ

ぞれの事例について検討を行う。

1つ目は、「認知発達の気がかり」のグループである。発語のなさ、会話の難しさ、また、担任からの指示に沿って行動する困難さを持つ子どもが事例として挙げられることが多い。2つ目は、「注意衝動のコントロールの気がかり」のグループである。興味をひく物があると、そちらへ注意が逸れてしまい、活動に集中できなかったり、クラスにいられないような子どもが事例としてよく挙げられる。「家族環境の気がかり」のグループには、両親のどちらかが不在・病気・虐待など家庭環境が不安定で、家庭との連携が難しい事例が挙げられる。

3. グループ事例検討の紹介：「家庭環境の気がかり」グループ

ここで、X年度の「気になる子どもの保育フォーラム」における「家庭環境の気がかり」グループの事例検討の流れを取り上げたい。事例検討にて、参加者は自他のケースから振り返り、新しい視点を得る。どのような検討を経て保育者の気づきへと繋がったのかを報告する。このグループは、3つのグループの中では特に個別性が高いグループで、事例数は少ないが多様な事例が検討されている。家庭環境のみ気がかりという事例はほとんどなく、多くは家庭環境の気がかりを含む複数領域に気がかりが存在する。X年度には、単親家庭や保護者が心身の病気を抱えている事例が多く挙げられていた。保育者は子どもの生活面での気がかりを感じながらも、保護者との連携を取るのが難しい事例が多かった。

その中で、一年を通して、第一著者がファシリテーターとなり、検討した事例を中心に報告する。

これは、グループの中の話し合いで、成長や変化がみられ、一年間の経過を発表するモデルケースに選ばれたものである。本児は2歳児クラスに所属し、園で食事が取れないとのことであった。発達的には気がかりな点はないが、大人の様子を

よく見ており、繊細さを感じさせる子どもであった。保護者は園と相談できる関係を築けていたが、単親家庭でもあり、近隣に頼れる人がおらず利用できる資源が限られていた。

1) 「事例検討の経過：第1回

第1回研修では、5事例の報告があり、それぞれの事例について検討を行った。グループとしての顔合わせの回なので、それぞれ簡単な自己紹介を行い、緊張をほぐしながら、活発な討議が行える雰囲気づくりをファシリテーターはスタッフと共に心がけた。また初回の研修であったため、どのような事例か、どういった点が気になりなのか等を中心に報告・共有が行われた。限られた時間で全事例の検討を行うため、予め参加者が記入した事例検討用資料や、個別のアンケート得点が回覧され、ファシリテーターは適宜得点の解釈について説明した。また効率よく事例を報告できるよう検討点を明確にしたり、参加者のコメントをまとめ、課題を焦点化することに留意した。

検討の中ではそれぞれ多様な気になりな点が挙げられたが、本事例に関しては、家でも園でも激しい偏食が気になりな点として挙げられた。食べられるものは白米など限られているということだった。検討では、栄養的に不足がないなら食事の時間を楽しめるような工夫をしてみることや、まだ家庭の状況など不明な点も多いので、より子どもと家庭について知ることが提案された。また、本事例も他と共通して、大人とのかかわりの中で気持ちを落ち着ける体験が少なかったため、保育者とのかかわりの中で子どもがまず落ち着ける・安心できるようにかかわることが課題として浮かび上がった。そこでファシリテーターとして、彼らの思いを代弁していきながらなだめる方法について焦点づけていった。参加者から、対人関係面では、他児と遊べるように保育者が仲介するという課題や、他児の遊びに誘ったり、声掛けをするなどの工夫が挙げられた。

家庭への対応としては、まず子どもの育ちを共有することから連携し始めることを課題とした。子どもを園で育て、その育ちの共有から連携が可能であり、子どもが育つと言う視点で、園としてはこう考えていると親に伝えていくことが必要であるということが話し合われた。

2) 事例検討の経過：第2回

第2回研修では、第1回研修を受けて、どう対応して子どもにどのような変化があったのか、また現在は何が課題となっているのかについて検討することが目的である。前回と今回を繋ぎ、その先を考えるとという観点でファシリテーションを行った。「気になる子どものアンケート」の数値に関しても、前回からの変化をファシリテーターから説明した。

事例においては、第1回目にて、食事を楽しめるようにしてはという提案を受けたこともあって、保育者は気長に構えられるようになっていた。第1回目と比べて、本児も食事場面で自ら手を出すようになったり、その時間を楽しめるようになっていた。そこから、慣れるのに時間が掛かる子なのだ気づいたということを保育者は報告した。検討では、園児の変化や、主体的に取り組めるようになったところを保護者と共有し、今後どうかかわるかについて話し合わせ、このようなかわりは、他の事例との共通課題となった。出来ない点を保護者に分からせるのではなく、子どもが苦心しているところをどうやったら出来るようになるのか、という視点で連携する重要性についてスーパーバイザーから話があった。また、気になりな点は共有されているが、他の保護者の目を気にして園の行事に参加することに消極的な保護者に対して、園での活動の目標や意味を伝えることが話し合われた。上記を受けて、何を育みたいかを保護者と共有する、という共有の仕方をグループの課題としてファシリテーターが抽出し、提示した。また全事例に共通して、園での個別のかかわりや子どもの育ちについて、園内研修を開く等、

園全体で目標を定めることが課題として考えられた。困難な事例を担当者だけが抱えるのではなく、園全体で共有していくことが大切である旨が確認された。

3) 事例検討の経過：第3回

第3回では、モデルケースとして一年間の保育者のかかわりの報告が行われた。報告に際して、ファシリテーターが報告者と一緒に資料作りを行う等サポートを行った。研修を経て、どのような変化があったのかの観点で報告ができるよう補助した。保育者や保護者のかかわりによって、徐々に自分で食事を選んだり、「ご飯は食べたい」と自分から言えるようになり、一年の終わりでは満腹になると「ごちそうさま」と言って食事を終えられるようになった様子について報告された。

当初、焦りもあった保育者だが、研修を経たこともあり、気長に関われるようになった。何事も慣れるのに時間が掛かる子どもである、という保育者の気づきもあり、本児の主体性を重んじるかわりを園でも家庭でも行っていた。忙しい中食事を工夫する保護者に対しても園はサポートしていた。

グループの課題としてあがった、園全体での対応の話し合いも実施し、食事を主体的に選べるような環境を用意する等、全体でこの事例について考える体制を整えていた。身体的な心配もあり、他機関へも繋げたが、園全体で対応してくれる園を保護者は一番頼りにしていた。

なかなか食事がとれない子どもへの対応の発表を通じて、家庭環境に気がかりのある事例特有の保護者支援についても触れられた。気になる子どもだけでなく、頼れる資源が限られている保護者も含めて家庭を園全体で抱え、安心できる環境の中で徐々に子どもも主体的に行動できるようになった。本研修を活かしながら園で気がかりな事例を抱えるという一つのモデルケースであったと考えられる。

4. ファシリテーターが心がけるべき留意点

以上から、ファシリテーターはグループの事例検討が円滑に行われるために、どのような事を留意すべきかを考えたい。

第一に、グループ全体で事例について考えられる雰囲気づくりを心がけている。発表者とファシリテーターだけの一方的なやりとりにならないように、いきなり討議に入るのではなく、最初に自己紹介の時間を設けたり、参加者がグループとしての意識が持てるように促す。参加者は、新任からベテラン、園長、主任、多岐に渡っているので、出来るだけ多くの参加者からの発言を促し、多様な意見が出る検討を心がけている。

第二に、発表者が十分に事例について伝えられるようにサポートすることを心がけている。要点を聞いたり、検討点を絞ったり等のサポートを行う。「気になる子どものアンケート」結果の数値の解釈は個別の事例で触れるようにしている。例えば、家庭環境が気がかりな事例だが、認知発達や注意衝動性の気がかりも高い事例であるなど、事例とどう繋げて理解するかを具体的に取り上げる。

第三に、参加者の理解が進むようなファシリテーションを心がける必要がある。参加者それぞれが気がかりな点に対するアドバイスを得るだけでなく、グループとして他の事例を聞き、考える視点を得ることがグループ事例検討では大事なポイントの一つである。同様の事例でグループを構成しているため、状況や課題が似たような事例はその点を検討中に言及して、参加者が事例と事例を結び付けやすくしている。理解が深まるように、関連した事例を順に発表するように、発表の順番もファシリテーターが考える。また何を意図してかわり、結果どうなったのか事例を時系列で理解できるように資料作りや検討を行えるように補助する。スーパーバイザーや他の参加者のアドバイスを実践にどう生かせるか具体的に考えられるようにサポートすることを心がけている。

IV 「気になる子どもの保育フォーラム」参加者の振り返りの分析

1. 参加者の振り返りにについて

上記の一年間の継続研修を体験して、研修の目標である「参加者が、気になる子どもの保育に孤立感を持たずに、自信を持って取り組めるようになること」がなされていたのか、研修会後の参加後アンケートを元に検討する。

2. 参加後アンケートの分析

X年度及びX+1年度第3回研修会終了後に、参加後アンケートにて一年間の継続研修を経て①「子ども理解が広がったり、深まったかどうか」、②「具体的な対応を考えるヒントが得られたかどうか」について、全くそう思わない[1]～とてもそう思う[4]の4件法で尋ね、その回答を集計した。

研修会に一年間参加することが参加者にとってどのような体験となったかを明らかにするため、参加者の感想の自由記述を分析した。47名のアンケートの自由記述から52の感想を得て、KJ法を用い、カテゴリを作成した。記述の抽出は、「一年間の研修会を通して、思ったこと、考えたことをお聞かせ下さい」の自由記述を1枚のカードに文章ごとに記入し、それらを意味のあるまとまりごとに集約した。KJ法は、保育臨床に携わる臨床心理士3名で行った。

3. 参加後アンケートの結果

1) 数値から見た参加者の体験

「子ども理解が広がったり、深まったかどうか」と「具体的な対応を考えるヒントが得られたかどうか」について、研修会の参加後アンケートの回答を集計した結果、表1の通り、いずれも高い結果となった。

表1 参加者の体験

項目	平均
子ども理解の広まりや深まり	3.89
具体的な対応のヒント	3.82

2) 一年間の研修会参加の感想

KJ法の結果、研修参加者の振り返りは、大きく3つのカテゴリから構成された。その3つは、参加者同士、お互いに気がかりな事例が共有・共感でき、他の事例から学べた等の6つの小カテゴリからなる「事例発表を通して学んだこと」、研修を通して、気になる点だけでない子ども理解ができるようになった等、4つの小カテゴリからなる「子ども理解の視点の広がり」、園内での事例の共有・連携の重要性、保護者対応の重要性等3つの小カテゴリからなる「子どもを取り巻く環境への対応」であった(表2)。

表2 研修会参加の感想

大カテゴリ	小カテゴリ	数
事例発表を通して学んだこと	共有・共感できた	6
	他の事例から学んだ	6
	参考になった	6
	自分の事例について振り返りができた	3
	資料作成が学びに繋がった	2
	自分の事例についてアドバイスがもたらえた	2
子ども理解の視点の広がり	気になる点だけでない子ども理解	6
	子どもの変化に沿った対応が学べた	5
	子ども目線の大切さへの気づき	3
子どもを取り巻く環境への対応	子どもの背景理解	3
	園内での共有・連携	5
	保護者対応の重要性	3
	余裕を持って関わりたい	2

続いて、参加者の研修会体験を検討するため、これらのカテゴリを図示した(図2)。参加者の学びとその応用・実践の軸に沿って、カテゴリを配置した。研修体験を振り返った結果、参加者は研修を通して学んだことや学んだことの実践への応用について述べていた。研修会が各自事例を持ち寄り、検討するという形態を取っているところから、参加者は事例の共有・共感ができ、他の事例から工夫を学んだ等と感じていた。また「気になる子」への対応に関する研修だが、気になる点だけでない包括的な子ども理解に繋がったり、子ど

も側に立った視点が広がったことが明らかになった。さらに、園内連携や保護者対応など子どもを取り巻く環境全体を視野に入れた対応についても考えられた。このように、継続型保育者専門研修を通して、参加者は新たな視点や示唆を得ていた。「参加者が、気になる子どもの保育に孤立感を持たずに、自信を持って取り組めるようになること」という研修会の目標は達成できていたと考える。

V 考察

本稿では、「気になる子どもの保育フォーラム」の中でも、特に事例検討会の経過に着目し、研修会の目標に基づき、参加者の研修体験について考察した。その際、心理職の役割は、研修会での学びが促される構造を活かせるような雰囲気づくり

をすることと、ファシリテーターとして参加者が事例を理解することを促し、グループに働きかけ、事例検討を活性化することであった。

本研修は、保育者のエンパワーを目的としているため、参加型体験学習の形態を重視した。むしろ心理教育は参加型学習の効果が高い（宮崎, 2013）。研修会参加者それぞれが自分の事例を発表することにより、ただ講師から保育の方法を学ぶだけの研修ではなく、主体的に事例について考えやすい構造を設定した。同様の事例が集まっている保育者でグループを構成することで自分だけが困っているのではないと共感できたり、他の事例から学べたという感想も多く、これも研修の目標と合致している。

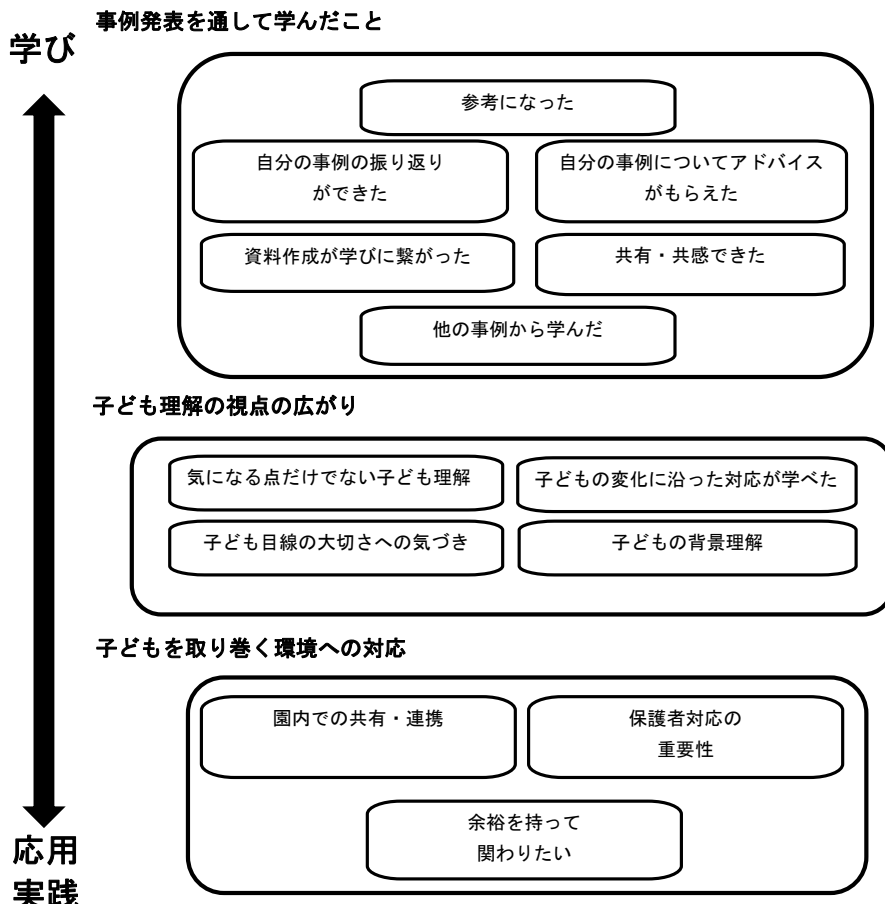


図2 一年間の研修会参加の感想

アンケート分析の結果から、研修会を通じて、子どもの理解が広がったり深まったりしており、対応のヒントも得られていることがうかがえた。このように、気になる点だけでない子ども理解が広がったことが示され、保育者に気づきが多い研修であったことも感想に出ていた。

保育者の気づき・内省についてはその重要性が指摘されており(杉村・朴・若林, 2009), 子どもへの質の高い保育には内省が重要である。しかしそうしたかかわりに関する知識だけではなく、実際の行動と結びつける訓練が必要であると指摘されている (Tomlin, Sturm & Koch, 2009; Gloeckler & Niemeyer, 2010)。年間を通じて本研修に参加することで、子どもの問題が軽減し(富田ら, 2012), 園内で事例を共有し検討する機会が増えた(斉藤ら, 2014)という保育実践の変化が見えたところからも、本研修はそうした訓練になりえたのではないだろうか。

心理臨床家は事例検討での具体的な助言のみならず、グループ体験のファシリテートを行うことで、保育者自身が気づき、考える、という保育者の主体性を支えることができたと考える。保育者支援、すなわち、心理臨床家が行う子育て支援領域での“支援者支援”として、一つのあり方を例示したと言えるだろう。

<謝辞>日頃より保育臨床に関してご指導いただいている諏訪保育園島本一男園長をはじめ、A市私立保育園協会の先生方に心より感謝申し上げます。

<付記>本論文の一部は、日本保育学会第67回大会で発表した。

文献

青木 紀久代 (2001). 気になる子の保育について
平成 11・12 年度障害児等保育研究委員会報告書
八王子私立保育園協会

- 青木 紀久代 (2002). 児童心理(発達臨床心理)の立場から. 小児保健研究, **61**(2), 217-221.
- 青木 紀久代 (2006). 保育における「気になる子ども」を巡る専門研修. 家庭教育研究所紀要, **28**, 61-68.
- Aoki, K. & Baba, R. (2002). Facilitation of infant mental health services in nursery schools: training of the nursery specialists in Japan. Poster session at the 8th congress of World Association for Infant Mental Health
- Gloeckler, L. & Niemeyer, J. (2010). Social-emotional environments: Teacher practices in two toddler classrooms. *Early Childhood Research & Practice*, **12**(1), 1-9.
- 本郷 一夫・澤江 幸則・鈴木 智子・小泉 嘉子・飯島典子 (2003). 保育所における「気になる」子どもの行動特徴と保育者の対応に関する調査研究 発達障害研究, **25**(1), 50-61.
- 今野 直子・青木 紀久代・島本 一男・黒川 祐貴子・宮田 真利子・斉藤 あゆみ (2014). 継続型保育者専門研修における効果(1) 日本保育学会等 67 回大会発表要旨集, 502.
- 松古 洋佳 (2012). ケースカンファレンスから見えてくること——保育への影響—— 子育て支援と心理臨床, **5**, 73-77.
- 宮崎 圭子 (2013). サイコエデュケーションの理論と実際 遠見書房
- 森田 望・渡邊 真伊 (2012). 保育園・常勤臨床心理士の取り組み 子育て支援と心理臨床, **5**, 68-72.
- 斉藤 あゆみ・青木 紀久代・島本 一男・宮田 真利子・黒川 祐貴子・今野 直子 (2014). 継続型保育者専門研修における効果(2) 日本保育学会第 67 回大会発表要旨集, 503.
- Shimamoto, K., Aoki, K., Mori, C., & Tomita, K. (2008). Collaboration with nursery specialists and psychologists on child-care support service in Japan (5): Skill-up of Nursery Specialists by Training. *Supplement to the Infant Mental Health Journal*, **29**(3A).
- 杉村 伸一郎・朴 信永・若林 紀乃 (2009). 保育における省察の構造 幼年教育研究年報, **31**, 5-14.
- 富田 貴代子・青木 紀久代・島本 一男・黒川 祐貴子・今野 直子・斉藤 あゆみ (2012). 保育における「気になる子ども」の変遷 (1) 日本保育学会第 65 回大会発表要旨集, 496.
- Tomlin, M. A., Sturm, L. & Koch, M. S. (2009). Observe, listen, wonder, and respond: A preliminary exploration of reflective function skills in early care providers. *Infant Mental Health Journal*, **30**(6), 634-647.
- 全国保育協議会(2008). 全国の保育所実態調査報告書